

平成28年度 あきたスマートカレッジ (報告)

Bあきた教養講座

B14～16：日本近代文学への招待 昭和編

講師：秋田大学 准教授 山崎 義光 氏

会場：秋田県生涯学習センター3階 講堂

【趣旨】北条常久シニアコーディネーター・高橋秀晴県立大教授・山崎義光秋田大准教授の3人の先生方による近代文学の講座です。明治期・大正期・昭和前期を代表する作家をリレー形式で取り上げ、時代をたどります。

講座記号	期 日	テーマ	参加者数
B14	11月26日(土)	昭和編① 宮沢賢治 『ポラーノの広場』	64
B15	12月17日(土)	昭和編② 川端康成 『雪国』	67
B16	H29年1月28日(土)	昭和編③ 太宰治 『女生徒』	56
合計			187名

山崎先生曰く、「講座が、作品を読むあるいは読み直すきっかけになればと思います」とのことでした。

ここでは、1回目の講座について報告します。

宮沢賢治は、存命中に多くの未発表原稿を書き残します。今回紹介された『ポラーノの広場』も未発表(未完成)原稿として書き残されていたものの一つです。

講座を始めるに当たって、「読んだことのある方はどれくらいいらっしゃいますか、」との質問に手を上げたのは3名ほどの方のみで、多くの方が知らない作品でした。山崎先生は、『ポラーノの広場』の魅力について、とても丁寧に語ってくださいました。

魅力の一つは、「仮想世界(イーハトーヴォ)に住む仮想人物が書き残したものを宮沢賢治が日本語に翻訳した」という形で書かれているところにあります。そして、実際に描かれている世界は、賢治が暮らす当時の岩手の風景が組み入れられており、「仮想と現実が入り乱れている」ところにもまた魅力があります。そして、更に7年前のことを思い出して書いている「回想録形式」をとられているのに、小説中頃まで読み進むまで文中に「現在は何年」という記述がありません。それが「1927年」とされていることから「賢治が翻訳したのは1934年の設定」となります。実際の執筆期間は1924年～1931年であり、「近未来小説として書かれている」ことがわかり、これもまた魅力の一つです。

さらに、「主人公たちは、最初は伝説のポラーノの広場を探し求めるのですが、どこかにあるものを探し求めるのではなく、最終的には自分たちで『理想とするポラーノの広場』を作り上げようとする物語」です。作中では「賢治が翻訳した1934年には、ポラーノの広場を作り上げることに成功」しており、昨今話題の「地域創造の物語」を賢治の詩的な世界観で書かれているのが、最大の魅力と言えるでしょう。

山崎先生の以上のような説明にどんどん引き込まれ、『ポラーノの広場』の魅力に引き寄せられ、皆が全編を是非一度は読みたいと思うに至った講座となりました。

